

平成22年5月24日現在

研究種目：若手研究（B）  
 研究期間：2006～2008  
 課題番号：18791740  
 研究課題名（和文）  
 高齢期における SOCEO の測定とその影響の検討  
 研究課題名（英文）  
 Measurement of Spousal Obligation to Care for Each Other in Elderly People  
 研究代表者  
 原沢 優子 (HARASAWA YUKO)  
 名古屋市立大学・看護学部・講師  
 研究者番号：70303774

## 研究成果の概要：

一般高齢者の調査結果では自分の介護を担って欲しい存在に配偶者が第一位にあがる。しかし、介護する配偶者がどのような心理状態で介護を行っているのかについては明らかになっていない。本研究では、配偶者が要介護状況になったときの介護者の心理過程について仮説モデルを作成した。このモデルをもとに本研究で抽出した様々な心理状態が配偶者介護の実態にどのような影響を及ぼすのか、実証的研究を進めることが今後の課題である。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	700,000	0	700,000
2007年度	800,000	0	800,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	180,000	2,280,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学

キーワード：夫婦間介護、高齢者、扶養義務

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 内閣府が2002年に行った60歳以上を対象にした調査において「介護が必要となったとき、誰に介護されたいか？」に対する回答は「配偶者またはパートナー」が46.7%で一位を占めた。この調査には、配偶者がいない人も含まれている。半数を占める回答が介護を配偶者に求めるものであったこの結果は、高齢者自身が、“高齢期の介護において配偶者の存在は重要である”と回答している

ことに等しいと考えられた。現状の配偶者介護者の割合は全介護者数の3割程である。これまで介護者の主流は子供世代であった。従って、配偶者介護者の介護に関する研究は少ない。主介護者に配偶者が望まれる理由は何か。配偶者を介護しようとする心理はどのような概念で構成されるのか、配偶者に介護されたいという希望は叶っているのかなど明らかになっていないことは多い。それ故に、配偶者が介護することの介護効果について

も客観的に明らかではない。

つまり、配偶者に介護を求めるとい実態はあるがその心理がどのような概念で構成され説明できるのか、配偶者間で互いを支えあわなくてはならないと思う気持ちの程度は介護実態にどのような影響を及ぼしているかについては把握されていない状況であった。

そこで、介護状況を仮定して配偶者間で互いを支え合わなくてはならないと思っている義務的な感情をテクニカルタームとして「a Spousal Obligation to Care for Each Other (以下、SOCEO)」と設定し、その概念を整理すること、概念を測定する方法を検討し、介護実態との関連を実証したいと考えた。

(2) 研究の意義として、世帯構成の将来見通しの観点から家族構成が変化し、子供が親の介護を担うよりも配偶者が健在な限り配偶者間での介護を希望する高齢者層が増えるであろうと推察されたこと、男性の平均寿命が延び配偶者と共に老後生活を過ごす期間が延長している傾向は今後も続くことと推察されること、男性の家庭における役割が変化し、介護などの家事的役割を男性も担う風土が日本社会に広がる可能性があることから、本研究は日本の未来に向けた社会ニーズに対応できると考えた。

## 2. 研究の目的

### (1) SOCEOを構成する概念の明確化

## 3. 研究の方法

SOCEOを構成する概念の明確化を目的に以下の(1)～(3)の調査を計画および実施した。また、本研究の対象は配偶者の介護を行う65歳以上の高齢者と設定し、「配偶者介護者」と便宜上の名前を付けた。

### (1) 配偶者介護者の介護義務感に関する分析

2004年にA県内にて要介護認定を受けている要介護者の主介護者559人を対象とした郵送式調査研究の結果から配偶者介護者を抽出し、その介護義務感の特徴を分析した。このデータは施設介護者と在宅介護者の両者を含むデータである。介護に対する義務的な感情の傾向と介護態度の実態から面接調査で使用するインタビューガイドを検討する目的で行った。

### (2) 施設介護を行う配偶者介護者への面接調査の実施

B県内の介護老人保健施設Cにて施設入所介護中の配偶者介護者を対象とした半構成的面接調査を実施した。インタビューガイド

として介護に至るいきさつから今日までの介護状況についてどのような出来事があったのか自由に語って頂く形式をとった。また、介護過程での様々な出来事毎にどのような気持ちを抱いたかが詳細に語られるように研究者がインタビューを主導した。また、面接時や面接日の要介護者と介護者の様子、施設スタッフから得た介護者の状況などをフィールドノートとして記録し、面接で得たデータを解釈する際の補助として利用した。調査目的は、SOCEOを構成する概念の探索である。

### (3) 在宅介護を行う配偶者介護者への面接調査の実施

B県内の介護老人保健施設Dにて在宅介護中の配偶者介護者を対象とした面接調査を実施した。研究方法(2)の調査と同じインタビューガイドで実施した。研究方法(2)の結果に加えて在宅介護者の心理状態を把握し施設介護者のそれと違いがないことを確認する目的で実施した。

## 4. 研究成果

### (1) 配偶者介護者の介護義務感の特性

A県内にて要介護認定を受けている要介護者の主介護者559人を対象に行った調査結果は、回収された調査紙が305票(回収率54.6%)、半分以上に欠測のない272人を分析の対象とした。そのうち配偶者介護を行うものは男性26人、女性37人であった。

#### ①「介護者になった主観的理由」：男女の傾向

配偶者介護者に対して「自分が主介護者になった理由」について8つの質問をした。回答選択肢は「全く違う、かなり違う、少し違う、少し当てはまる、まあまあ当てはまる、まさに当てはまる」の6段階のリッカート尺度を用いた。結果は表1の通りである。統計学的に有意な男女差はみられなかったが、「私以外の家族は、介護をしたがらないから」、「他の身内と分担して、介護を受け持つことになっているから」の項目が最も男女の得点差があった。男性は女性に比べてこれらの意見に「まさにあてはまる」と回答している傾向にあり、男性は、家族の中における役割分担の条件によって自分自身が介護を行うことが自然なのだと理由付けを行っていると考えられた。

②「配偶者の介護を義務的に行う傾向」を把握するために25の質問をした。回答は①と同様のリッカート尺度を用いた。結果の一覧を表2に示す。統計学的に有意な男女差があったのは『経済的なことは、子どもにたよるほうがうまくいく。』、『夫婦の一方が家事をこなせない状況ならば、夫婦のもう一方が、家事を頑張るのは当然だ。』、『家事は、公的な福祉サービ

スをうまく使って、夫婦でなんとかするべきだ。』の3項目であった。男性は、経済的なことを子供に頼るとうまくいくとは考えず、全体的に夫婦だけでなんとかしていくべきであるという思考が女性に比べて強い傾向にあった。

①②の結果から男性介護者は、自分が介護をしてあげたいというよりは、家族役割の使命感から介護を行う傾向があり、その介護の行動様式は他者のサポートを受けずに夫婦だけで乗り越えなくてはならないと自己を拘束的に捉えてしまう傾向にあった。

表1 介護者になった主観的理由

	性別	平均値*
(1) 『要介護高齢者には、私以外に頼りにできる家族が少ないから』	男性	3.63
	女性	3.87
(2) 『介護高齢者の方の介護は、自分がしたい』と強く希望しているから』	男性	3.19
	女性	3.21
(3) 『他の身内に比べて、私は時間的に余裕があるから』	男性	3.63
	女性	3.50
(4) 『私以外の家族は、働いているから』	男性	4.04
	女性	3.81
(5) 『要介護高齢者との続柄上、私が介護をするのは当然だから』	男性	4.67
	女性	4.77
(6) 『要介護高齢者との続柄に関係なく、私が、介護をするのが自然だから』	男性	4.27
	女性	3.92
(7) 『他の身内と分担して、介護を受け持つことになっているから』	男性	1.69
	女性	1.24
(8) 『私以外の家族は、介護をしたがらないから』	男性	2.12
	女性	1.57

\*得点:0点=全く違う~5点=まさに当てはまる

表2 配偶者の介護を義務的に行う傾向

	性別	平均値*
(1) 『夫婦は、お互いが日常生活に困らないよう、経済的に支えあうべきだ。』	男性	4.46
	女性	4.59
(2) 『夫婦ならば、配偶者が日常生活に困らないよう、経済的援助をするのは当然だ。』	男性	4.42
	女性	4.49
(3) 『経済的なことは、子どもにたよるほうがうまくいく。』(反転)	男性	2.83
	女性	3.54
(4) 『経済的なことは、子どもにたよるよりも夫婦で、なんとかすべきだ。』	男性	3.80
	女性	4.08
(5) 『夫婦は、介護が必要になれば、お互いに介護をして、支えあうべきだ。』	男性	4.58
	女性	4.19
(6) 『夫婦ならば、配偶者の介護をするのは、当然だ。』	男性	4.52
	女性	4.17
(7) 『介護は、子どもに手伝ってもらったほうがうまくいく。』(反転)	男性	2.38
	女性	2.00
(8) 『介護は、子どもに手伝ってもらいよりも、夫婦でなんとかすべきだ。』	男性	3.85
	女性	3.29
(9) 『介護は、公的な福祉サービスをうまく使って、夫婦でなんとかすべきだ。』	男性	3.91
	女性	3.67
(10) 『介護は、夫婦だけでがんばってやっていくべきだ。』	男性	3.15
	女性	2.50
(11) 『ちょっとした用事やおつかいを頼めるのは、やはり夫婦である配偶者にたいしてだ。』	男性	3.88
	女性	3.14
(12) 『夫婦は、お互いに家事をして老後を支えあうべきだ。』	男性	4.08
	女性	3.75
(13) 『夫婦の一方が家事をこなせない状況ならば、夫婦のもう一方が、家事を頑張るのは当然だ。』	男性	4.24
	女性	3.71
(14) 『家事については、子どもにたよるほうがうまくいく。』(反転)	男性	2.42
	女性	2.56
(15) 『家事のことは、子どもにたよるより夫婦で、なんとかすべきだ。』	男性	3.04
	女性	2.97
(16) 『夫婦は、公的な福祉サービスをうまく使って、夫婦でなんとかすべきだ。』	男性	3.50
	女性	2.86
(17) 『夫婦ならば、家事のことは、夫婦だけでなんとかすべきだ。』	男性	3.15
	女性	3.03
(18) 『夫婦は、お互いが一緒に生活することで、安心できるものだ。』	男性	4.24
	女性	4.37
(19) 『たとえば夫婦の片方に介護が必要な状況になっても、「一緒にいれば、ほっとする」のが、夫婦というものだ。』	男性	4.38
	女性	4.10
(20) 『夫婦は、介護をする場合も、お互いに支えあいたいと思うものだ。』	男性	4.31
	女性	4.16
(21) 『夫婦は、介護の大変さも、互いに分かち合いたいものだ。』	男性	4.23
	女性	4.11
(22) 『夫婦というものは、他の誰でもなく、配偶者に介護をしてもらえる、安心できるものだ。』	男性	4.23
	女性	4.32
(23) 『子どもよりも、夫婦どうしの方が、介護は気を使わないものだ。』	男性	4.15
	女性	4.00
(24) 『夫婦どうしよりも、子どもに介護をしてもらうほうが、気を使わないものだ。』(反転)	男性	2.96
	女性	3.26
(25) 『子どもに介護をしてもらうほうが、夫婦どうして介護するよりも、なにかと安心だ。』(反転)	男性	2.84
	女性	2.76

\*得点:0点=全く違う~5点=まさに当てはまる、反転はこの逆で得点化した

## (2) SOCEO を構成する概念の明確化

施設介護を行う配偶者間介護者への面接調査でSOCEO を構成する概念の要素として21の要素を抽出した(表3)。また、この21の要素を抽出する過程で、これらの要素には発生順序が想定されること、要素間で相互作用があると考えられること、要素間の関連の強さの違いが考えられた。総合すると心理過程の仮説モデルになると考えられた。

表3 配偶者介護者のSOCEOに含まれる21の要素

心情(カテゴリ)	概念の整理
1 恩情	『深い関係にある相手へ向けた深い思いやりの心であり、これまでの関係による恩義を含めた心情』
2 慈愛	『夫婦の愛情が、配偶者が要介護状態になったことで相手への慈しみを包含して表出された心情』
3 感謝	『相手に対する過去の活動に向けられた謝意の気持ちであり、謝意と共に相手への敬意を含む心情』
4 一体感	『夫婦としての長い生活体験の中で互いに共有された心理への自覚であり、肯定的に解釈されている心情』
5 自負	『自分自身の行為や才能が他者からも評価されると確信し、誇りをもつ心情』
6 安堵感	『心が落ち着く、ほっとする、和む、安らぐという意味を網羅する親密な他者との間において生じる心情』
7 安心感	『心配事がないこと、不安が無いことであり、環境や状況に対して感じられる心情』
8 義務感	『その人が培ってきた道徳的な判断を基盤にした役割を全うしなくてはならないとして自己を拘束する心情』
9 不安感	『安心のできない事、漠然と悪いことが起こるのではないかと気になる心情』
10 気兼ね	『周囲への気遣い、思いやりが混合し、遠慮、配慮となって自分の行動や言動を制限する動機となる心情』
11 諦め	『やりたいことを断念しなくてはならない状況、または、やりたくないことを拒否できない状況における心情』
12 孤独感	『自分自身が一人きりであると感じる心情』
13 はりあい	『生きようとする気持ちや活動の原動力を示す心情』
14 疲労感	『身体的もしくは精神的にくたびれること、負荷を感じた場合に生じる心情』
15 償い	『過去の自身の行動・行為・言動が、相手に苦労や大変さを煩わせたという認識から、それを代償したい心情』
16 閉塞感	『自分自身の状況が八方塞がりであり、自分自身と周囲との間に障壁または心の隔たりに感じる心情』
17 期待	『自分自身の行動・行為・言動の見返りとして、相手から自分が求めている反応が得られることを望む心情』
18 後悔	『自身の過去の行動・行為・言動を振り返って悔やむ心情』
19 いらだち	『他者に対して自分の思うとおりに物事がいかず、相手を否定的に捉えて怒りを感じる心情』
20 つらさ	『気持ちがあっても身体がついて行かないジレンマの辛さを抱く心情』
21 罪悪感	『施設に入れるのは見捨てるみたいなど介護選択において生じる罪悪感』

一つの概念に正と負の相関関係がある要素が入り込んだ場合、それらを一纏めで測定してしまうと要素別に影響先への特徴があったとしても相殺されることが想像できる。研究当初はSOCEOを構成する概念を一つのものとして捉えて測定することを目標としていた。そして、介護実態との関連を把握する予定であった。しかし、今回の結果からこれを一つのまとまった概念に抽象化せず、現時点で留めることが測定に意味をもつのではないかと検討した。

そして、この面接調査は施設介護を行う配偶者介護者を対象に限定していたため、在宅介護を行う配偶者介護者を対象に同様の追調査を実施した。

(3) 追加調査は2007年度～2008年度に実施した。この追加調査の結果では、配偶者介護者が要介護者を「介護している」と捉えるよりも「夫婦として生活を続けているだけ」と捉えている点が強調された。施設介護を行う配偶者介護者にはこの点が強調されなかったが(2)における面接調査結果を再吟味すると施設介護者も介護をしているというよりは、夫婦として生活を続けているだけと捉えていると解釈する方が自然であった。

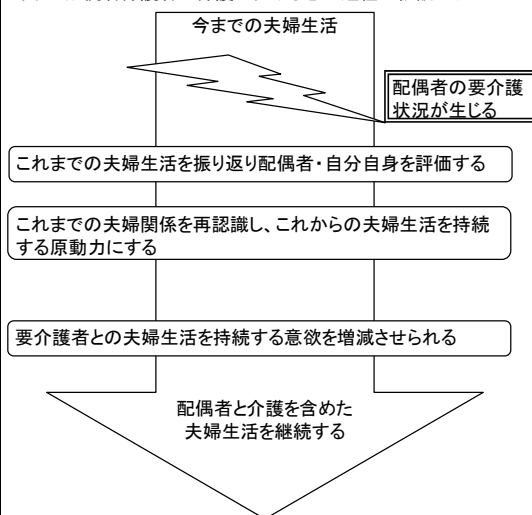
施設介護を行う配偶者介護者のインタビュー結果から抽出した21の要素については、類似のカテゴリーが抽出された。さらに同様に時間経過で心理の発生順序が整理されることや要素間の相互作用の類似性が見られた。

(4) 配偶者介護者の介護における心理過程の仮説モデルの作成

①施設介護者および在宅介護者の面接調査結果から、SOCEOを構成する概念を一つ概念とせず、いくつかの概念に分けて心理過程を説明する仮説モデルを作成した。

②心理過程の仮説モデル作成にあたり、21の要素が介護者の心理状態として形成される時間経過別に整理した。次に、夫婦関係と介護関係の違いが整理できるように分類した。最後に、配偶者介護者の介護継続意欲にポジティブに影響していたもの、ネガティブに影響していたものに注意して分類した(図1)。

図1 配偶者介護者の介護における心理過程の仮説モデル



③「これまでの夫婦生活を振り返り配偶者・自分自身を評価する」

配偶者介護者は、配偶者の要介護という危機に直面した際、これまでの夫婦生活を振り返り配偶者、自分自身を評価していた。自分自身は配偶者としての役割を果たしてきたか、配偶者に負担を掛けていなかったか、要介護状態の配偶者は配偶者としての役割を果たしてきたか、自分との関係・子供との関係はどうであったかなどを振り返り、最終的な評価を下していた。評価は配偶者への感謝に結び付いたり、償いたい気持ちに結び付いたりしていた。また、次の心理へと繋がっていった。例えば、これまでの夫婦関係における配偶者の評価が「貯金もせず姑との確執で苦労をするばかりであった」と語った人は要介護の配偶者と伴に暮らさなくてはならないことを悲劇的に語り、積極的な介護を行うつもりがないと語った。一方で「本当によく働いてくれた人だったから」と感謝を語った人は、できるだけのことをしてあげたいと献身的で思いやりのある介護を行っていた。

④「これまでの夫婦関係を再認識し、これからの夫婦生活を持続する原動力にする」

配偶者介護者は夫婦としての生活を続けていくにあたり夫婦関係の再認識を行っていた。要介護状態の配偶者との関わりの中で夫婦としての一体感を再認識する、夫婦と一緒にいることに安堵を覚えるなどしていた。そして自分自身が配偶者としてできる役割を果たしていきたいと意識を新たにしていた。また、その際には、二人の今後の生活に対する展望を持つこともできていた。これらの心理過程を配偶者介護者は、今後の二人の夫婦生活を

持続するための原動力に据えていた。

⑤「要介護者との夫婦生活を持続する意欲を増減させられる」

しかし、介護を行う過程で様々な出来事が起こり時には介護を継続する気持ちを減退させたり、また時には、頑張っていこうと力をもらったりしていた。

例えば、介護をする過程で自分の老いや健康障害を強く感じると介護への意欲は減退していた。また、自分の人生の自己実現が介護によって満たされない状況に陥るケースでも、介護を含めた夫婦生活の維持に対する意欲が下がる傾向が窺えた。

また、親としての役割を果たそうという気持ちが強い男性介護者には子供に頼らないで自分だけで介護を行う傾向があった。この場合は、介護への意欲を強めていたが同時に疲労感も強かった。

社会とのつながりでは、社会性を良好に持続させることができると親類や近隣者からの精神的な支援を受けることができ、夫婦としての生活を維持する意欲に繋がっていた。しかし、親類や近隣者との関係を良好に保てないと社会とのつながりを自ら絶つ行動が見られ、孤独な状況を嘆きつつも孤独な状況を作り出している様子がみられた。

(5) 今後の課題

SOCEO を構成する概念として配偶者介護者の介護における心理過程の仮説モデルを作成した。今後の課題は、これらの仮説モデルの心理の発生順、要素間の関係を実証することである。また、さらにはこの心理過程と介護実態との関連についても実証することである。その為に以下の二つの計画を立てている。これらを2010年～2011年にかけて実行して行く予定である。

①仮説モデルの実証的確認方法

自記式アンケート調査の実施。B県内に在住する65歳以上の一般高齢者1000人を対象とした自記式アンケート調査を実施する。選挙人名簿より該当年齢者を無作為抽出法で抽出する。これまでの夫婦生活における配偶者評価、配偶者としての役割意識、過去の仕事に対する考え方、賞賛欲求の程度、身体的健康状態、精神的健康主観、配偶者の介護に対する意欲・義務感、自分が誰に介護されたか・その理由、配偶者を介護する意欲、子供に介護を期待する程度などを調査する。分析はパス解析を用いる。また、配偶者を介護したいと考える側面と配偶者に介護されたいとする両側面から検討する。

②配偶者介護者の心理過程と介護実態との関連を実証する方法

B県内にて施設介護、在宅介護を行う配偶者介護者を対象として配偶者介護者の介護における心理過程の仮説モデルの実証確認と介護に対する意欲、介護への負担感、社会サービスや子供の手助けに関する考え方などとの関連を検討する。

これによって、社会サービスを利用せずに抱え込み介護と呼ばれる孤立的な介護者の個人の特性を把握することができれば今後の看護実践に役立てると考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

①Yuko Harasawa、Katsuhide Kawamoto、Eri Iijima、Masasige Saito、Yuko Kuramochi、Masami Hasebe、The Characteristics of the Spousal Obligation to Care for One Another、The 5th international conference of Health and Behavioral Science、Proceeding、査読無、2007、pp241-245

②Kazushi Okamoto、Yuko Harasawa、Tomoko shiraishi、Kiyomi Sakuma、Much communication with family and appetite among elderly persons in Japan、Archives of Gerontology and Geriatrics、査読有、vol. 45、2007、pp319-326

③Kazushi Okamoto、Yuko Harasawa、Yumiko Momose、Kiyomi Sakuma、Risk Factors for 6-year mortality by gender in a Japanese elderly population、Archives of Gerontology and Geriatrics、査読有、vol. 45、2007、pp335-341

[学会発表] (計1件)

①Yuko Harasawa、Katsuhide Kawamoto、Eri Iijima、Masasige Saito、Yuko Kuramochi、Masami Hasebe、The Characteristics of the Spousal Obligation to Care for One Another、The 5th international conference of Health

and Behavioral Science、p79、2006.8、in  
Bangkok、Thailand.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

原沢 優子 (HARASAWA YUKO)

名古屋市立大学・看護学部・講師

研究者番号：70303774